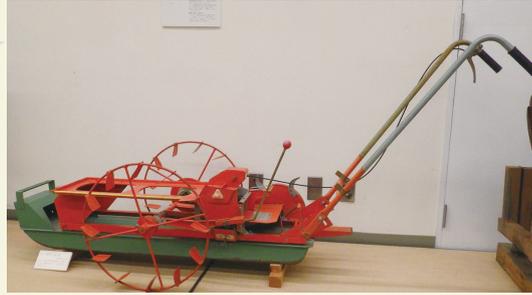


「手押し式田植え機」  
カンリウ工業製



手押し式田植え機（平成 14 年市民から寄贈）

ところで…

よそから蒲郡を訪れた人は、「田んぼが少ないね」とよく言います。統計をひもとくと、現在、市内の田んぼの面積は約 30 ヘクタールで、今から 50 年前、昭和 45 年は約 400 ヘクタールでした。ふるさとの風景は大きく変化したといえるでしょう。



昭和20年代の市内の田植え風景  
(近藤写真館提供)

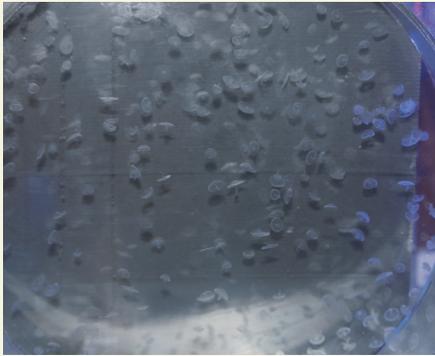
昭和初期、5～6月に泥田の中で腰をかがめて行う田植えは、農家にとって実につらく、手間のかかる作業でした。

昭和 30 年代末に登場した手押し式田植え機は、通常の約 10 倍のスピードで田植えをすることが可能でした。同資料の説明書には「疲れ知らずに 1 日 30～50 アールの田植えができる」とあります。動力は使われておらず、人が押す力を利用して苗を田んぼに植えていく仕組みになっていました。

昭和 40 年代には田植え作業の機械化が進み、この手押し式田植え機は、あまり世間に普及することなく姿を消しました。現存するものは少なく貴重な資料です。



小林 龍二



小さな小さなクラゲの赤ちゃん

昨年 11 月からたけすいに来たルーキー学芸員の山田君の提案で、クラゲ水槽を奥のゾーンへ移動させました。この水槽はすごく人気で、入り口に設置してあると皆さんがクラゲをジックリご覧になるので、狭い館内の入り口がすぐ大渋滞になってしまい、もっとゆっくりに見てもらえるように、という提案でした。

竹島水族館では「ミズクラゲ」

というクラゲの中のクラゲ、我が所がクラゲの代表種、というような種類のその辺の海に浮いているやつを展示しているのですが、すごく人気です。透き通っていて水中にのんびりフワフワ漂う様子は癒されるからでしょうか。しかし、あんなもん蒲郡では岸壁から海をのぞけば必要なほど頻繁に見られます。しかしこれが水槽に入りガラス越しに見ると一変、大人気の癒し生物なのです。

クラゲは何も考えてなさそうなのですがデリケートで、飼育展示するとなると結構難しい生物で、管理をサボったり、水質やエサなどをしっかり勉強して飼育しないとすぐに死んでしまいます。2 人の飼育員で管理していますが毎日手間も時間もかなり大変です。継続して展示するために展示裏で繁殖しており、現在なかなか順調な様子。赤ちゃんクラゲがたくさんいて飼育員が毎日すさまじい愛情を注いで育てています。大きくなったものから順次展示水槽にデビューしていくそうですよ。